

山口県史だより

第27号／平成22年11月

特集 古写真と鳥瞰図にまつわるエピソード



上：松原繁撮影の写真（明治10年代か、個人蔵）

下：吉田初三郎「荒瀧山図絵」（部分、大正15年、宇部市教育委員会蔵）

特集 写真と鳥瞰図にまつわるトピックス

絵画、ポスター、絵はがき、写真、地図、絵図。図像資料に秘められた豊かな情報は、歴史の謎を解き明かす時、文字記録にはない威力を発揮してくれます。

今回の特集では、写真師松原繁と鳥瞰図絵師吉田初三郎の図像記録からのメッセージを手がかりに、近代山口の姿の一部を紹介してみたいと思います。

■明治十年代の写真

初代県会議事堂正面での撮影と推測される一枚の古い写真（表紙写真上）。洋服と和服が入り交じった様子に当時の雰囲気を感じることが出来ます。前列右から四番目には二代県令関口隆吉と思われる人物の姿が見えます。この議事堂が建てられたのは明治十一年（一八七八）、関口県令の在任期間は明治八年～十四年。こうした前提を踏まえるならば、この写真が撮影されたのは、明治十一年から十四年の間のことと推定できます。

■写真師松原繁

写真の台紙下部を見ると「八坂社内松原写」。さらに写真左下隅の貼紙には「山口県山口八坂社内写真師松原」とあります。撮影者の名は松原繁。明治十年代の県内の「商工図録」に写真師として紹介されている唯一の人物です。

松原が撮影した写真は、明治三十年代前半のものまでを確認できます（写真1ほか）が、表紙の写真は松原の明治十年代の活動を裏付ける最初の発見になります。

松原に関しては、士族であったこと以外、ど

こでどのようにして写真術を習得したのかなど、その経歴は明らかではありません。山口の写真のパイオニアとされ、明治初期に、山口伊勢小路のかつての大神宮鳥居近傍で写真館を開いたと伝えられる小野為八との関係など、今後解明すべき多くの謎が残されています。

なお、松原繁の息子精一も写真師であり、専門誌『写真新報』に写真術に関する文章を寄せています。明治末期には京都円山公園で写真館を開業していたとも言われています。円山公園は八坂神社境内地に隣接していますが、これは単なる偶然ではないのかもしれませんが。

■松原繁の写真館

明治二十年代前半に松原繁が建てたとされる写真館は、一〇年余りの歳月を経た今もなお八坂神社境内地にその姿をとどめています（写真2）。写真館として使われ続けた国内でも稀少な建物であり、下見板にまわれ塔屋を載せたその風貌や、ベランダ・両開き窓などに「地方の鹿鳴館」の雰囲気があります。山口で最初に西洋料理を供したとされる菜香亭に隣接して建てられたこの写真館は、「明治のハイカ



写真2 旧松原写真館正面（平成18年撮影）



写真1 松原繁撮影の写真（明治30年頃、個人蔵）

ラ」の薫りを今日に伝えてくれる貴重な市民の資産なのです。

■観光ルートマップ「荒瀧山図絵」

折本を広げれば、そこには宇部と吉部を結んだ船木鉄道沿線の風景が現れます。大正十五年（一九二六）十一月の船木鉄道吉部延伸を記念して制作されたこの鳥瞰図（表紙写真下）は、当時の吉部村長の要請で描かれたものです。鉄道開通をきっかけとした観光開発がもくろまれたのです。

終点吉部駅の先には、内藤氏の山城跡としてその名を知られる名峰荒瀧山のサクラに彩られた登山道が見えます。集落、温泉、神社仏閣、滝、溪流、山容など、色鮮やかに紹介された沿線の名所や風景が旅情をかきたて、人々を鉄道の旅へと誘います。景勝地として脚光を浴び始めていた秋芳洞も描かれています。

■鳥瞰図絵師吉田初三郎

鳥瞰図とは、その名の通り、鳥の目線で描かれたパノラマ図で、地図と風景画の両方の要素を備えたものです。描いたのは「大正広重」と呼ばれた、腕利きの鳥瞰図絵師吉田初三郎。初三郎が戦後にかけて制作した鳥瞰図は約一六〇〇点と言われ、ポスターやパンフレット類を含めるとその数は一万点にものぼるとされます。綿密な現地踏査によるスケッチに基づき、全体の構図や配色の指示を初三郎が行い、弟子達との共同制作というかたちで大量の鳥瞰図が世に送り出されていったのです。工房を支えた絵師

の一人で、初三郎から厚い信頼を寄せられていたのが柳井出身の前田虹映でした。

大正から昭和にかけての鉄道網や客船航路網の整備発達とも相まって、量産された初三郎の鳥瞰図が、「旅」を大衆の身近に引き寄せる大きな力となったのです。



写真3 「荒瀧山図絵」(部分)

■吉田初三郎の空間

「荒瀧山図絵」に目を転じると、中央には主題となる地域がデフォルメされて「わかりやすく」描かれ、上部周縁部には、見えないはずの富士山や東京、さらには北海道・樺太・朝鮮半島までが表現されています（写真3）。「近く」と「遠く」が絶妙に編集されているのです。変幻自在、大胆で新鮮、遊び心たっぷりの愉快な構図には、鉄路や航路に託された大衆の彼方へのあこがれもまた描き込まれていたのです。

絵巻物的な楽しさと山紫水明の美を堪能できる初三郎の鳥瞰図は、近代日本の光景を今日に伝えてくれる貴重な歴史資料として近年注目されています。（浅川）



写真4 吉田初三郎「山口県全図」(肉筆画、昭和22年)

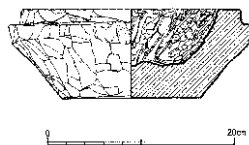
戦時下、軍事的な理由により鳥瞰図絵師の活動は制限されました。この作品は初三郎の戦後の代表作であり天覧の栄に浴したものです。重要文化財山口県旧県庁舎の正庁会議室に掲げられています。

中世の調理具「石鍋」

下の写真と実測図は、宇部市の下請川南遺跡から出土した、滑石製の石鍋の未製品です。中世にこのような石鍋を作っていた遺跡は、全国的にも珍しく、大変貴重なものです。

ここから切り出された未製品の石鍋は、別の場所で完成品に加工され、県内を中心に流通していたのでしょうか。当時の人々はこの石鍋でどんな料理を作っていたのでしょうか。

(担当 今地・岡松・河村)



下請川南遺跡(宇部市)出土の石鍋
(山口県埋蔵文化財センター提供)

近世部会

「ごちそうさま」

下の史料は、近世後期の萩藩の借銀高を記したもので、年々増加していったようですがわかります。こうした藩の窮状に、家臣は一定額の米を「御馳走米」の名目で差し出しました(もちろん、命令です)。

収入の半分を出すこと(半知)もしばしばで、疲弊する家臣は「ごちそうさま。もういらん」という殿様の言葉を待っていたのかもしれない。

(担当 河本・宮崎・湯谷・小田)



文政11～天保4年(1828～33)の借銀高
〔御借銀高付抜〕／部分、東京大学史料編纂所蔵 益田家文書19-93)

明治維新部会

武州の豪農、根岸家

根岸友山は、長州藩の産物交易で塩や蠟燭などの専売権を与えられ、清河八郎ら尊皇攘夷派とも交流し、久坂玄瑞からは、来訪時の礼状も送られました。同家は、極秘に長州藩江戸藩邸から、緊急時の避難先にも指定されます。

その後、H・シーボルトやE・S・モースも訪れ、『日本その日その日』(モース著)で紹介されています。友山の子、武香は吉見百穴の発掘援助や保存に尽力します。

(担当 阿比留・宮本・村里)



根岸家長屋門(埼玉県熊谷市)

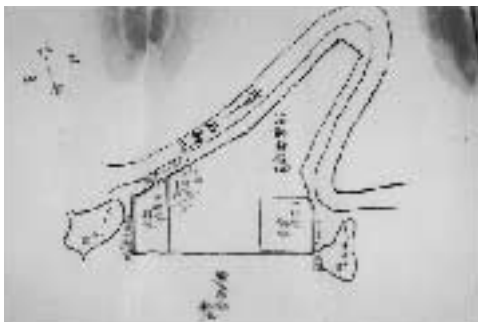
近代部会

山田開墾と鴻城小学校

札幌市北部の篠路拓北地区。明治十年代半ば、この地に地所の割り渡しを受けたのが初代司法大臣山田顕義です。萩や大島など山口県からの入植者により大地が切り拓かれはじめました。

山田開墾に設けられた私塾は、のちに郷里の学校にちなんで鴻城小学校と名付けられました。厳しい冬や水害を乗り越え、学舎は人材を育み続け、今もなお地域の発展を見守っています。

(担当 浅川・木下・田村)



山田開墾の概念図(北海道立文書館蔵)

民俗部会

スサノオと黄帝
 萩市須佐の地名はスサノオが大陸へ往来するとき拠点とした事に由来するとされています。スサノオは、日本書紀では高天原を追放されて新羅に渡ったとされ、石見神楽では、唐に渡って疫病除けの神鍾馗しゅうわいになったとされます。須佐の高山の黄帝社こうていは中国の黄帝を祀り、造船・航海の神として信仰されました。これらの伝承や信仰は、東アジアの国々と交流した人々の存在をうかがわれます。(担当 石永・古屋)



須佐宝泉寺・黄帝社奉納船絵馬は今年、国の重要有形民俗文化財に指定されました。

現代部会

現代と歴史史料の保存
 県指定有形文化財の一つである山口銀行旧本店に併設された「やまぎん史料館」は、山口銀行のアーカイブです。アーカイブとは、公文書やその保管所を意味する言葉で、最近では民間にもアーカイブによる歴史史料保存の動きが広がっています。現役を終えた様々な文書が、歴史史料として生まれ変わるまでの長い時間を過ごす、ゆりかごのような役割も担っています。(担当 津枝・山本・林)



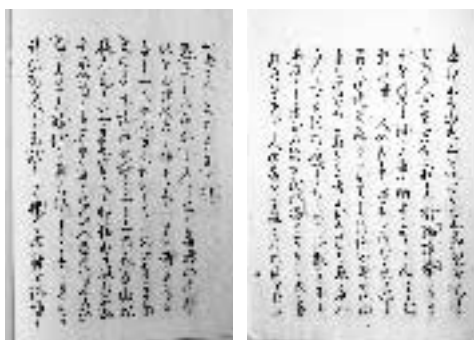
山口銀行旧本店

山口県歴史モノ語り 23

改訂版

今年発刊した『史料編 近世5』には、山口県における近世の文化に関連する史料を収録しました。このなかに、山縣周南(萩藩校明倫館二代目学頭、萩生徂徠の弟子)の著作を掲載しました。そのひとつ「為学初問」は、宝暦十年(一七六〇)の版行で、同十四年に改訂版が出されました。

双方を比較すると、「かな」の変更(例えば、わ↓ハ)や誤字・脱字の修正は、該当部分のみ版木(板木)の修正がされること、文章が脱けていたとみられ、版木そのものを作り替えたようです。この本の各丁の片面は九行ですが、改訂版ではウラを二〇行にして収めています。多くの「為学初問」には、版行年の印刷がなく、『国書総目録』(岩波書店)などの情報をもとに調査した結果、前記のように理解することができました。史料を活字にするとき、写本しか現存せず、それが複数ある場合は比較検討する必要があります。木版本も原稿が現存すれば問題ないでしょうが、版行年がはっきりしない場合は特に比較して見る必要があるのではないのでしょうか。(河本)



為学初問 下が改訂版
 (「吉田樟堂文庫」596(上)・597(下)、山口県文書館蔵)

祖父から受けとったもの

タレント 松村 邦洋



モト冬樹さんの結婚式で、冬樹さんの九六歳になられるお父様とお話をさせていただきました。冬樹さんの名字は江東といつて、本籍は山口県です。ご先祖は四国で江東水軍を率いていましたが、長宗我部に追いやられて山口に逃げてきたそうです。お父様の話を聞いているうちに、亡くなった自分の祖父を思い出しました。子供の頃、祖父の話を聞いて歴史が好きになり、祖先のことも祖父から教えてもらいました。

僕も先祖も落人で、大内義隆の足軽でしたが、家臣の陶晴賢に追いやられて、山口市の小鯖から熊毛郡の田布施のさらに山奥まで逃げてきたと聞きました。歴史の中に自分の祖先の存在が見え、そこから自分までつながっていることに興味をわき、家に古くからある過去帳を小学生の頃から何度も見直し、一人で家系図を書いたりして楽しんでいました。特に地元の歴史に興味をわき、祖父を毎日のように質問攻めにしました。田布施には吉田松陰の松下村塾で授業をしていた富永有隣が住んでいて、僕の家裏山で落馬した話を、まるで自分がみたように話してくれました。国木田独歩も田布施に住んでいて、富永有隣をモデルにして「富岡先生」という小説を書いた話もしてくれました。時には「勝てば官軍、負ければ賊軍、勝者が敗者を裁く歴史の積み重ねで今の世の中になった」なんていう真面目な話もしてくれました。四〇歳を過ぎてようやくその言葉の意味もわかるようになってきました。教科書に書いてない歴史が、知れば知るほど深く、面白くてたまりません。

大河ドラマでは、大村益次郎の生涯を描いた「花神」が大好きでした。司馬遼太郎の原作を忠実に映像化していて、最近の脚色し過ぎの大河ドラマとは一味違います。かつて中国地方を治めていた毛利家が、関ヶ原の戦いで敗れ防長二州に追いやられ、二六〇年間たまった鬱憤を晴らしたのが明治維新だったように思います。

六〇歳を過ぎたら、地元山口県の歴史を巡る旅をしなごら過ごしたい、と思う今日のごころです。

地域に根ざす・26



楠文化協会

本会は、「郷土文化の研究をするとともに、楠地域の文化の向上をはかるものとする」(会則)として、昭和四十三年(一九六八)九月に会員五〇名で発足しました。初代会長は元船木町長の故長谷川卒助先生でありました。一時は三〇〇名近い会員を擁していましたが、現在は一〇〇名程度で活動しています。

発足当時の活動は、昭和四十四年一月創刊の『くすのき文化』という会誌の刊行を中心に、文化講演会、史跡探訪、文化祭の開催、各サークルの育成等、幅広いものでした。文化協会という名が示すように、当初、会員は個人会員とサークル会員の二本立てでありました。

しかし、各サークルが独自に活動されるようになり、今では、個人会員のみとなりました。活動としては、文化講演会と史跡探訪、そして総合地域文化誌的な性格を持った『くすのき文化』の刊行を行っております。最新の六一号は、「船城銀行から宇部銀行へ」、「荒滝山城跡案内」、「闘鶏楽の被り物(頭冠)について」、「現代語訳(抄) 舟木宰判 風土注進案 東吉部村 一」、「毛利元就の郷を訪ねて」、「思い出の記 大東亜戦争勃発」、「詩・短歌・俳句」と、多岐にわたる内容のものになりました。

宇部市では、平成二十三年をめどに、江戸時代に船木宰判代官所が置かれた宿場町船木に、「ふるさと学習館(仮称)」が建設される予定です。本会は、この施設を拠点に、新たな活動を展開したいものと期待しているところであります。

事務局 宇部市大字船木

楠総合支所内 地域振興課

代表 山名 厚徳



『史料編 中世』の活用術

中世部会では、今までに『史料編』全四巻を刊行してきました。現在は、中世部会としては最後の巻となる『通史編 中世』の編さん作業が続いています。

ところで、既刊の『史料編』には、山口県に関わりのある興味深い史料が多く収録されています。これらの史料を学校現場でも活用していただけると幸いです。

歴史の授業だけでなく、古典の授業や総合的な学習の時間などでも利用していただけるのではないかと思います。もちろん、授業時数や教授内容との関わりや、児童・生徒の発達段階を考慮すると、『史料編』に収録された史料をそのまま提示するのは難しいことかもしれません。しかし、原史料を紹介するだけではなく、原史料から得られる情報をエピソード的に紹介するだけでも、生徒の興味・関心を喚起することができるのではないかと思います。生徒は身近な地域の歴史に目を向けることで、日本史を身近なものとして再認識することでしょう。

以下に、『史料編』の中から、授業で使えるのではないかとと思われる史料を列挙してみましよう。

①東大寺の再建と重源 阿弥陀寺文書や南無阿弥陀仏作善集、東大寺造立供養記の記述の中から重源の事績について紹介する。また、沙石集の中のエピソードを紹介する。これは比較的読みやすい、短い文章ですので、古典の授業でも教材として扱えるのではないのでしょうか。

②元寇に際しての国内の対応 「異国降伏」のための祈禱関係文書（正法寺文書、住吉神社文書、修禪寺文書ほか）が多く発給されたことを紹介して、国内の対応について考えさせる。

③南北朝の動乱期 太平記からのエピソードを紹介したり、足利尊氏・足

利直冬らが、戦勝祈願の後、報謝の意を込めて下関市の忌宮神社に和歌を奉納していることを紹介する（豊浦宮法楽和歌）。

④明徳の乱・応永の乱・応仁の乱と大内氏 明徳記、応永記、応仁記からのエピソードを紹介する。また、太平記も含めて、軍記物はストーリー性もあり、読みやすい文章なので、原文を紹介することで、古典に親しむ契機になるのではないのでしょうか。

⑤大内政弘と新撰菟玖波集 住吉社法楽百首和歌の序文（三条西実隆）を紹介し、新撰菟玖波集成立に大内政弘が多大な貢献をしたことに触れるとともに、同集に政弘の作品が多く収録されていることを紹介する。また、中世を代表する「座」の文芸である連歌の特徴を知ること、中世文芸への興味・関心を喚起することができるのではないのでしょうか。

⑥中世の交通路や当時の景観 道ゆきふり、鹿苑院西国下向記、筑紫道記などの紀行文では、山口県内の中世の交通路とその周辺の景観が細かに記されています。中世の景観と現在の景観を比較することで、地域の自然環境の変化に注目させ、改めて身近な地域の環境について考えさせる契機になるのではないのでしょうか。



『山口県史 史料編 中世』全4巻

以上、『史料編』収録史料の活用的一端を記してみました。このほかにも、活用できる史料は多くあると思いますので、少しでも『史料編』を授業に活用していただけたらと思います。

また、現在編さん中の『通史編』が刊行されましたら、併せて活用していただきますよう、お願いします。

(今地)

こちら
県史編さん室

◆山口県史『民俗編』、『史料編 近世5』、『史料編 幕末維新4』、『史料編 近代2』を刊行

『民俗編』は、全一六章構成で、山口県民の暮らしぶりの特徴を、民俗を手がかりに浮き彫りにしました。『史料編 近世5』は、山口県の近世において育まれた多様な文化に関する史料を収録しました。『史料編 幕末維新4』は、幕末

幕長戦争を多面的に捉えることができるようにしました。『史料編 近代2』は、明治期における本県の政治・社会の状況や教育・文化の真相を示す史料を収録しました。

◆『古谷道庵』の呼称について

前号の表紙と特集「幕末維新期における民衆意識」のなかで「古谷道庵」の呼称を「ふるたにどうあん」としましたところ、「ふるやどうあん」ではないかとの指摘をいただきました。

ご子孫の方々をはじめ関係機関から聞き取り調査を行いましたところ「ふるたに」と「ふるや」二通りの呼称が使われておりました。

県史編さん室が「ふるたにどうあん」の呼称を用いたのは、下関市の文化財登録名によるものです。

◆第一九回県史講演会を開催

去る十月三十日、山口市の「山口県教育会館」を会場に第一九回山口県史講演会を開催しました。講師は、山口県史編さん専門委員の小川亜弥子先生（福岡教育大学教授）で、「幕末期長州藩と洋学―大村益次郎、中嶋治平、手塚律蔵が歩んだ道―」と題して講演されました。

長州藩出身のこの三人が獲得した洋学知識や翻訳技術、さらには洋学先進地域で形成した人的ネットワークなどを武器に激動の幕末期を生き抜いていった様子を語られた講演は、多数の参加者を引きつけ盛会のうちに終わりました。



講演中の小川先生

山口県史の構成・刊行計画 (全41巻)	
	【通史編】 6巻
既刊	原始・古代
	中世 世新
	近世 世代
	幕末 維新
	近代 代
既刊	【民俗編】 1巻
	【史料・資料編】 33巻
既刊	考古1 (原始)
既刊	考古2 (古代以降)
既刊	古代 (古代史料)
既刊	中世1 (記録)
既刊	中世2 (県内文書1)
既刊	中世3 (県内文書2)
既刊	中世4 (県内文書3・県外文書・文学資料)
既刊	近世1 (政治1)
既刊	近世2 (政治2)
既刊	近世3 (経済1)
既刊	近世4 (経済2)
既刊	近世5 (文化)
	近世6 (諸家文書1)
	近世7 (諸家文書2)
既刊	幕末維新1 (政治・社会1)
既刊	幕末維新2 (政治・社会2)
既刊	幕末維新3 (政治・社会3)
既刊	幕末維新4 (政治・社会4)
	幕末維新5 (経済)
既刊	幕末維新6 (軍事)
	幕末維新7 (文化・海外史料)
既刊	近代1 (政治・社会・文化1)
既刊	近代2 (政治・社会・文化2)
	近代3 (政治・社会・文化3)
既刊	近代4 (産業・経済1)
既刊	近代5 (産業・経済2)
既刊	現代1 (県民の証言 体験手記編)
既刊	現代2 (県民の証言 聞き取り編)
既刊	現代3 (言論・文化 ブランゲ文庫)
	現代4 (産業・経済)
	現代5 (政治・社会)
既刊	民俗1 (民俗誌再考)
既刊	民俗2 (暮らしと環境)
	【別編】 1巻
	年表

山口県史だより 第27号
平成22年11月26日発行
編集・発行／山口県県史編さん室
〒753-8501 山口市滝町1番1号
TEL 083-933-4810
FAX 083-933-4869